

概 要

第 16 回 市民と市長の対話ひろば ～もりりと語ろう、宝塚市の未来～

テーマ：公立学校園では日本初！

西谷地区で国際バカロレア（IB）教育を通した

幼稚園から中学校まで一貫した探究型学習の取組へ

日時：令和 8 年 1 月 26 日（月） 午後 1 時 30 分～午後 3 時 40 分

場所：ピピアめふ 1 和風ホール

参加者：49 名

出席者：

森市長

国際バカロレア機構

アジア太平洋地域開発及び高大連携アソシエイト・マネージャー 黒川礼子さん

教育委員会管理部－高田部長 教育委員会学校教育部学校教育担当－三ヶ尻次長

《説明》

1 国際バカロレア（IB）について

- ・1968 年、スイス・ジュネーブで設立された非営利の教育機関。
- ・国境を越えて移動する子どもたちの学びを継続させる目的で創設。
- ・現在は 162 か国、6,000 校超で導入されている。

2 IB の提供するプログラム

- ・年齢段階に応じた 4 つの教育プログラムを提供。
- ・プライマリー・イヤーズ・プログラム（PYP：3～12 歳）
- ・ミドル・イヤーズ・プログラム（MYP：11～16 歳）
- ・ディプロマ・プログラム（DP：16～19 歳）
- ・キャリア関連プログラム（CP）

3 IB の使命と教育理念

- ・多様な文化の理解と尊重を通じ、より平和な世界の構築に貢献する人材の育成を目的とする。
- ・知識の習得にとどまらず、探究心、思考力、思いやりを重視。
- ・使命を具体化したものとして「学習者像」を設定している。

4 IB 教育の基本的な考え方

- ・教育は「学びによって動かされるもの」と位置づける。
- ・教師や生徒の主体性を尊重し、画一的な教育を行わない。
- ・各国・各学校の文化や制度に応じて柔軟に導入・運用される。

5 IB 教育の特徴

- ・構成主義を基盤とし、生徒一人ひとりの経験や知識をもとに理解を深める。
- ・探究型学習を重視し、学習の過程そのものに価値を置く。

- ・教員は知識の伝達者ではなく、学びを支える役割を担う。
- 6 教科横断・学際的な学び
- ・PYP では教科の枠を超えた学びを実施。
 - ・MYP では教科横断型の学びを必須とし、複数教科による共同単元を設定。
 - ・高等段階では専門性を高めた学際的な学びへと発展する。
- 7 日本における IB の導入状況
- ・日本国内では 141 校が IB 認定校となっている。
 - ・国別導入数は世界で 7 番目に多い。
 - ・公立・国立校は約 16% で、私立やインターナショナルスクールが中心。
- 8 IB と日本の教育との関係
- ・IB の理念は、日本の教育基本法が掲げる教育理念と方向性が重なる。
 - ・「生きる力」を育む教育として、国内教育との親和性が高い。
- 9 IB 教育の目的
- ・教室内の学びを社会で活かす力を育成する。
 - ・変化の激しい社会において、自ら考え行動できる人材の育成を目指す。

➡ 市長

- IB 教育経験者である高校 3 年生の小谷さんに発表を依頼

《小谷さん（IB ディプロマ・プログラム経験者）の発表》

1 概要

- ・高校にて IB ディプロマ・プログラム（DP）を履修。
- ・現役高校 3 年生で、12 人学級の少人数制。
- ・PYP・MYP は未経験だが、DP のみを経験。
- ・IB は探究学習に特化した特別な教育ではなく、普通科高校と同様の基盤教科を学んでいる。
- ・主要 6 教科と、授業時間を固定しない 3 つのコア科目で構成される。

2 IB の授業・科目構成の特徴

- ・主要 6 教科は一般的な高校科目と同様の枠組みで学習。
- ・コア科目は自主的な学びが中心で、自律性が求められる。
- ・カリキュラムは固定的ではなく、教員も試行錯誤しながら授業を構成。
- ・プレゼン、議論、ゲーム形式など多様な授業形態が用いられる。

3 教科ごとの学びの特徴

- ・文学：書籍を読み、自ら問いを立て、議論を通じて論述を深める。
- ・文学（比較）：複数作品を比較し、共通点・相違点の意味や社会的背景を考察。
- ・歴史：暗記ではなく、出来事の因果関係や背景を分析し論述する。

- ・数学：試験は英語で実施され、電卓使用可。答えよりも思考過程の説明を重視。
- ・各教科が相互につながる教科横断的な学びが特徴。

4 IB での主な発見①（教員と学びの関係）

- ・教員も「教える側」ではなく「共に学ぶ学習者」として授業に関わる。
- ・授業では生徒が話す時間が多く、生徒の考えが重視される。
- ・教員の意見が常に正解ではなく、生徒の論が評価される場面もある。

5 IB での主な発見②（能動的な学習）

- ・問題集がなく、自ら問いを立てる学習が中心。
- ・資料や文献を分析し、根拠をもとに自分の考えを構築する。
- ・明確な「終わり」はなく、納得いくまで思考を深め続ける。

6 IB での主な発見③（実生活への影響）

- ・物事を多面的に捉える力が身についた。
- ・「なぜそう感じるのか」を深く考える思考習慣が形成された。
- ・「無知の知」を自覚し、他者の意見や情報の価値を強く認識するようになった。
- ・議論を通じた他者理解や、未知への関心が高まった。

7 IB 生の進路について

- ・IB 生が必ず海外進学するわけではない。
- ・高校では、海外進学はおよそ半数程度。
- ・海外大学は IB への理解が進んでいる一方、日本では IB 入試がまだ少ない。
- ・国内大学では共通テスト併用を求められる場合もある。

8 IB 生の進路選択の特徴

- ・進路選択において、目標・意義・理由を明確に持っている。
- ・何を学び、将来どのように活かすかを自覚した上で進学先を選択。

9 総括

- ・IB で得たのは、議論を通じた他者理解や、卒業後も役立つ思考力。
- ・自分の無知を自覚し続ける姿勢は、人生に大きな影響を与えた。
- ・課題量が多く自由時間は少ないが、それ以上に得るものが大きい。
- ・IB を選択して本当に良かったと感じている。

《対話》

1 参加者【IB 導入における教員の確保・研修体制について】

- ・公立校でも IB（PYP）は実施可能と考えている一方、新しい教育導入に対する教員の不安は避けられないと認識している。新設校における教員の配置方針や、IB に関する研修体制についてききたい。
- ・個人的関心として、将来的に宝塚市の IB 校で勤務できる可能性についても尋ねたい。

➡ 応答

- ・IB は公立・私立を問わず導入可能な教育フレームワークである。新しいプログラムを導入する上で、教員の不安は自然なものである。
- ・国内 IB 校のネットワークや連盟、必須の IB 教員研修を活用することで、段階的な導入が可能である。
- ・他校の事例をそのまま模倣するのではなく、自校に適した方法を教員自身が判断することが重要である。
- ・公立校では教員免許を前提とし、IB 研修を受けた教員が授業を担う形となる。
- ・宝塚市では市内教員を中心に、西谷地域を軸として関心のある教員の育成・研修を進めていく考えである。
- ・教員配置は県教委の人事制度の枠組みの中で行い、具体的な運用は今後検討していく。

2 参加者【IB 導入の実現可能性と国・他地域との整合性について】

- ・IB 教育を今回初めて知り、内容や市が対話を通じて検討している姿勢を、時代に即した教育の取組として前向きに受け止めている。
- ・西谷地域の活性化の観点からも、IB 導入に期待を寄せている。
- ・国の教育行政や他地域との整合性を含め、実際に実現可能か。

➡ 応答

- ・高知県の公立小・中学校における IB 導入事例を教育委員会とともに視察し、実践状況や課題を確認してきた。IB 導入後も時間割自体は大きく変わらず、主に授業内容や学びの進め方が変化している点を踏まえ、公立校でも導入可能との認識を持った。
- ・学校・教員・地域・教育委員会・市が同じ方向を向き、十分な研究と合意形成を重ねれば、現実的に実施できると考えており、現在は慎重かつ真剣に検討を進めている。

3 参加者【IB における使用言語（日本語・英語）と日本型 IB の考え方について】

- ・IB のコア科目（TOK・CAS・EE）が英語で実施されるのか、日本語で行われるのか。また、主要教科について、どの程度英語で授業や試験が行われているか。
- ・西谷で想定される日本型 IB において、英語教育を強化する考えがあるのか、市の方針を尋ねたい。

➡ 小谷さん

- ・コア科目（TOK・CAS・EE）はすべて日本語で実施している。日本語 DP と英語 DP があり、自身が通う高校では日本語 DP を採用している。

➡ 応答

- ・教育においては、まず母語である日本語による思考や深い学びを大切にしたいと考えている。英語でのコミュニケーション能力は重要だが、日本語の教育基盤を英語に置き換える考えはない。
- ・日本の学習指導要領を基本とし、その枠組みの中で IB の考え方を取り入れていく方向

である。

4 参加者【西谷での IB 導入に伴う通学・進路への影響と不登校支援について】

- ・西谷は地域的に不便で、バス路線の縮小も踏まえると通学手段に不安がある。
- ・探究型学習を行う学校から、IB 校ではない一般的な高校へ進学する場合、受験への影響が心配である。
- ・IB 導入よりも、不登校児童生徒への支援（特例校の設置、アシストルームの人員充実）を優先すべきではないかと。

➡ 応答

- ・西谷への通学については、バス路線やスクールバス機能を含め、今後も通学が可能となるよう制度設計を進めている。
- ・IB 導入校であっても学習指導要領に基づく基礎学力は確保され、卒業後は多くの生徒が一般の公立高校へ進学している。
- ・不登校支援についても、市内ですでに別室登校や支援校、アシストルームなど複数の取組を行っており、IB とは別に重要課題として継続的に充実を図っていく。

5 参加者【IB 導入校の開校時期と入学の仕組みについて】

- ・IB 導入校がいつ開校される見込みか。仮に 2～3 年後に開校する場合、途中学年からの入学可否や受験の有無など、入学の仕組みについて確認したい。

➡ 応答

- ・現在は調査・研究段階であり、開校時期を明示できる状況ではない。まず実現可能性を多角的に検証している。
- ・公立校であるため、転校等により途中学年からの入学も可能で、受験は想定していない。
- ・公立校の枠組みを維持しつつ IB の要素を取り入れる形となるため、従来の学校制度との連続性は保たれる。
- ・IB 認定までには段階があり、候補校・認定校へと進むプロセスが必要。
- ・PYP（小学校）や MYP（中学校）の場合、通常 2～3 年程度の準備期間を要する。
- ・準備段階（候補校）でも IB の教育的エッセンスは取り入れられる。

6 参加者【IB 校における特別支援教育の取組について】

- ・市内の学校では特別支援学級や通級指導が行われているが、IB 校となった場合、特別支援教育はどのように行われるのか。

➡ 応答

- ・IB 校であっても、特別支援学級はこれまでどおり設置される。
- ・教員は共通であり、IB に関する研修を受ける可能性はあるが、特別支援教育の基本的

な考え方や対応が大きく変わるものではない。特に発達段階や個々の状況に応じた対応が重要であり、現行の特別支援の枠組みを踏まえた運用になると認識している。

7 参加者【IB教育の成果の市内全体への波及と、導入に至った課題認識について】

- ・子どもには、内的動機に基づいて学ぶ姿勢を育ててほしいという思いがあり、黒川さんの説明や生徒の事例から、主体的な学習意欲を育てる教育として成果があると感じた。西谷小・中学校だけでなく、そこで得られた成果やノウハウを他校にも広げる考えがあるのか。
- ・現行の教育カリキュラムに対する市長自身の課題認識をききたい。

➡ 応答

- ・まずは西谷小・中学校をフィールドとして実践し、有効性が確認できた要素は市全体の教育に還元していくことが重要だと考えている。
- ・認定校を増やすこと自体は、財政面も含め当面は慎重に考える必要がある。
- ・海外での経験を通じて、日本の教育では子どもの主体性や自主的な学びを十分に引き出せていないのではないかという問題意識を持った。IBは、その名称そのものよりも、教員がこれまで試みたくても難しかった教育実践に挑戦できる「枠組み」を提供する点に意義があると考えている。

8 参加者【PYP・MYPの認定プロセスと導入時期の考え方について】

- ・PYP（初等）とMYP（中等）の認定がどのような順序・時期で進むのかききたい。先行して一方を認定するのか、同時進行で認定し、同一タイミングで児童生徒を受け入れることになるのか。

➡ 応答

- ・基本的には同時進行も可能との認識。文部科学省の学習指導要領を基盤とした枠組みは大きく変わらないため、特定の学年から段階的に始めることも、同時に導入することも研究対象になり得る。
- ・既存校でも探究的な学びの工夫が行われている事例がある。IBに限らず教育実践の広がり重要と考えている。
- ・PYPとMYPの認定順序に決まりはなく、それぞれ独立して認定される。学校の状況に応じて、最適なタイミングで導入・認定を進めるのが一般的である。
- ・すでに在籍児童生徒がいる学校では、特定の学年を待つ必要はなく、柔軟な導入が可能である。

➡ 市長

- 参加者（元教員）の方に現在の活動の発表を依頼

➡ 参加者発表

- ・市内小学校で実践されている探究学習は、多様性の理解や教科横断的な学びという点

で IB の理念と共通している。

- ・総合的な学習の時間を活用し、地域課題をテーマに仮説設定・提案まで行う実践が進められている。こうした取組が、公立教育の中でも主体的な学びを育てている事例である。

9 参加者【IB 導入に向けた教員研修の状況と地域・外部との連携について】

- ・IB 導入を契機に、教員の異動等を通じて取組が市内に波及していく可能性があるのではないかと。
- ・現在行われている IB に関する教員研修に対する反応や状況を知りたい。あわせて、地域や外部機関がどのように学校教育に関わっていくのか、事例や方向性について教えてほしい。

➡ 応答

- ・西谷地域の幼稚園・小学校・中学校の教員とは、すでに複数回意見交換を行っている。当初は不安や戸惑いも見られたが、現在は黒川さんを招いたオンライン研修（PYP・MYP）を定期的実施する方向で動き出している。研修は西谷地域に限らず、市内全域の教員がオンラインで参加できる形を検討している。
- ・南部地域の教員からも関心の声があり、教育委員会として研究チームを立ち上げ、理解を深めていく方針である。
- ・教員研修を起点に、IB の考え方が市内全体に広がっていく可能性に期待している。
- ・IB 校が地域からどのような期待を受け、どのように関わっていくのかという点について、今後さらに整理・検討していく必要がある。

10 参加者【IB 導入による基礎学力への影響と高校・大学進学への不安について】

- ・探究的な学びの意義は理解しつつも、基礎学力（国語・算数等）が十分に確保されるのかについて懸念がある。
- ・公立校で IB 的な学びを進めた場合、兵庫県の県立高校進学に必要な学力が身につくのか、塾通いが前提にならないか。
- ・高校卒業後について、海外進学や IB 入試を選ぶ生徒が多い理由が、学力不足によるものではないか。

➡ 応答

- ・他自治体の事例では、IB 導入初期に基礎学力への不安が出たが、カリキュラムの工夫により現在は十分確保されている。
- ・授業時間自体は従来と変わらず、過度に学習負担が増えるわけではない。本市が検討しているのは DP（高校課程）ではなく、PYP・MYP（小中学校段階）であり、その後は通常の公立高校進学を前提とするため、受験準備との両立は可能である。
- ・大学入試のあり方自体も、今後変化していく可能性がある。

➡ 小谷さん

- ・通っている高校では、国内進学者も多いが、共通テストを受験する生徒は少数である。
- ・共通テストで課題になりやすいのは数学で、IB での学び方や使用する数学的表現・言語の違いが影響している。一方で、IB 生は英語力が高く、英語・国語・情報などの科目選択により国内大学進学を実現している事例がある。

11 参加者【少子化時代における学校経営の危機と、教育の将来像について】

- ・私学の中高一貫校で校長・理事長を長年務めた立場から、少子化により学校が淘汰されていく現状への強い危機感を感じている。大阪府では、公立高校の統廃合や定員割れが進み、県外生徒募集などで何とか存続している学校も多い。
- ・今後さらに、生徒数の減少、教職志望者の減少が進むことで、学校教育全体が「成長産業でなくなる」おそれがある。兵庫県においても同様の状況に陥らないよう、教育委員会が長期的・抜本的なビジョンを早急に示す必要があると考える。

➡ 応答

- ・市の所管は小・中学校であり、高校政策は県の所管であることを前提とし、少子化の中でも、なすべき教育の質を保つことが重要である。
- ・教職を志す人が減少する背景には、教育現場での裁量の乏しさや、やりたい教育が実現しにくい状況がある。国際バカロレアの枠組みを一つの契機として教員が主体性と裁量を持ち、工夫ある教育を実践できる環境を整えることが必要である。
- ・良質な教育を地域で実現することが、人の流出を防ぎ、地域の魅力を高めることにつながると認識している。

12 参加者【宝塚市内における私立高校設立と選択肢の重要性について】

- ・宝塚市内における市立高校設立の可能性はあるか。特に IB プログラムを導入している市立高校の設立を検討しているかをききたい。
- ・日本の高校教育で重要視される内申点や、IB が重視する軸（自己表現や学びの記録）とのギャップを懸念している。
- ・大学入試の総合型選抜において、自分を表現できる環境が求められている。また、IB プログラムの選択肢を提供しつつ、他の学校との多様な選択肢が必要だと考える。

➡ 応答

- ・宝塚市内の公立高校の連携強化に注力している。市内の四つの県立高校と連携を進め、それぞれの特色を活かした教育を提供している。具体的には、例えば宝塚北高校では、市役所とのデータサイエンス協力、宝塚高校では環境学習の協力を進めている。
- ・市立高校設立の現実的に難しい。新たに市立高校を設立するには多くの障壁（文科省の認可等）があるため、現時点では県立高校との連携が最適な方針。市内の公立高校が提供する多様な選択肢を増やす方向で支援を行っている。

13 参加者【IB 導入における教育の本質と、不登校・特別支援への向き合い方について】

- ・IB の理念や「なぜ学ぶか」を重視する教育の考え方に共感しているが、IB は良い教育だが、費用や予算面の負担が大きくなるかを懸念している。
- ・不登校や特別支援を経験した立場から、個々に十分寄り添った支援や分かりやすい情報提供が不足していると感じている。
- ・意欲や志のある教員が力を発揮できる環境づくりと、教育分野への積極的な予算配分を求めたい。

➡ 応答

- ・IB 導入に係る費用は、私立校のイメージほど大きな負担ではなく、公立校として現実的な範囲で対応可能である。
- ・不登校や特別支援への対応は重要だが、教育全体の教え方や学校の雰囲気を見直すことが本質的な改善につながる。
- ・教員が本来やりたかった教育を実現できる裁量や環境を整えることが、教育の質向上につながると思っている。
- ・地域全体を学びの場とする考え方を重視し、IB においても実社会と結びついた学びを進めていきたい。

14 参加者【部活動の実施場所と地域連携について】

- ・部活動の位置づけについて確認したい。西谷地区で部活動が学校外で行われるという話を聞き、実際どうなるのか疑問を持っている。部活動を学校外で行う場合、どのように実施されるのか、距離や運営方法についても知りたい。

➡ 応答

- ・今の公立の枠組みでは、学校の教育委員会の管轄ではなくなったため、どうしても地域でということにはなるが、校内で部活動を行いたいという要望が強いため、教育委員会は学校内で活動できるよう努力している。

15 参加者【不登校について】

- ・IB 教育について理解し、素晴らしいシステムだと感じた。自身も教育に関心があり、特に不登校に関して興味を持っている。不登校の問題は市民にとって関心が高いテーマだと感じている。次回の市長の対話の際に、不登校についての会議を開いてほしい。

➡ 応答

- ・宝塚市の不登校に関する体制については現在調査中であり、しっかりと勉強し、対応を検討している。
- ・現在、学校ごとに独自の取り組みが行われているが、市としての統一的な体制がまだ十分に知られていない部分があり、不登校問題を本質的に再考し、改善策を模索してい

る。

- ・不登校の問題は整理に時間を要するため、すぐには実施できないが、今後考えたい。市政としても様々な課題があり、現在水面下で検証を進めているので、その結果を元に市民との対話の機会を作れればと考えている。

《市長まとめ》

- ・国際バカロレアに対する市民の関心が高まり、回を重ねるごとに前向きな雰囲気が増していることに感謝している。
- ・しかし、進め方については慎重に進め、学校の先生方を中心にしっかりと勉強・研究を行っていくことが重要だと考えている。
- ・市民の皆様にもその過程を見守り、共に学びながら課題解決に向けて考えてほしい。
- ・現在は関心校として研究を進めており、進展があれば報告し、質問を受ける機会も設ける予定。
- ・引き続き、関心を持っていただき、共に考えていくことを期待している。